

討議

【越】 それでは討論にうつりたいと思います。

【伊藤由希子（東京大学COE特任研究員）】 東京大学で死生学の研究員をしております伊藤由希子です。本日のお話、たいへん興味深く拝聴いたしました。「父後七日」という映画は、二〇一一年の春に日本でも公開予定でしたが、東日本大震災の影響で延期されてしまい、現時点では残念ながら見る事ができません。ここでは質問というよりも、情報提供も兼ねてコメントをしたいと思います。

二〇〇九年に日本臨床死生学会の大会が東京大学で開催され、私たちCOEスタッフもお手伝いしたのですが、その公開講演会で、映画「おくりびと」の原作である『納棺夫日記』をお書きになった青木新門さんがお話しになりました。青木さんは映画化の話がきた当初はそれを歓迎したのですが、できあがってきた映画の脚本を読んでいくうちに、その気持ちが変わってしまったそうです。青木さんは日本の仏教の宗派のひとつである浄土真宗を奉じていらつしゃるのですが、納棺師の仕事を通して、その信仰、宗教的な考えとこのを深めていっていらつしゃいました。しかし、そのような宗教的要素が、映画の脚本ではごっそり切り落とされてしまっていた。宗教的要素を削ぎ落とすということは死者ときちんと向き合っていないことであると青木さんはお考えになり、原作者として自分の名前をあげないで欲しいと映画の制作の方にお願ひし、その結果、映画の前面に出ることはなくなったわけです。

楊先生がおつしゃっていたように、この映画は愛と思ひやりという哲学的なことをテーマにはしていますが、

しかしやはり死というのは日常を超えるものが垣間見える場面でもありまして、そういう日常を超えるようなものの要素を削ぎ落としてこの映画が作られたという経緯は、現代日本の宗教儀礼のあり方のある一面をあらわしているように思いました。

【楊】 ご発言ありがとうございます。

私も論文の脚注の方で、そのような問題に触れています。「おくりびと」は儀礼には重点を置かず、登場人物の心理的成長をクローズアップしています。このような心理的成長のよってところは、死者と生者がその生前にはお互いに理解していなかったことが、納棺師の仲介によって理解されていくという点、つまり、死者が生前にやり遂げることができなかつたことを、納棺師が実現していくという点にあると私は考えています。ここでは、死や死者が日常の中にふたたび位置づけられるということが重要だと言えます。そういうこともあり、映画では、宗教的な儀礼に重点が置かれていなかつたわけです。

そういうこともありますので、映画「おくりびと」と、その原作とがまったく違う作品であるということは意識しておくべきだと思います。台湾の「父後七日」は原作者と映画監督が同一人物ですが、それとは背景がかなり違うことを考慮しておくべきでしょう。

【越】 この第二部の討論を終えるにあたり、私の方から簡単な総括をしたいと思えます。

ここでのお二人のご発表は、台湾の死生学の現状を紹介するものでした。

余・林両先生のご発表のご主旨は、台湾では死生学についての多くの言説が文字化されているということにあったと思います。しかし一方で、台湾の死生学には、感情的要素についての研究が欠けているのも事実です。



越健東氏

感情と一言で言っても、多種多様で複雑です。死生学が問題にしているのは、まさにこの複雑な感情のあり方なのではないでしょうか。そうしてみますと、私たちはこの複雑な感情それ自体を駆使しながら、複雑な感情の網の目を解きほぐしていくことが必要なかもしれません。

楊先生のご発表では、台湾の標準的な葬送儀礼が生者と死者両方の安寧を目指したものでありながら、しかしこれは若い人たちにはあまり有効なものではないようで、若い人は、むしろ儀礼が終わった後で初めて自分の感情を表すことができるということが指摘されていました。一方、「おくりびと」では儀礼の中で死者と生者の両者が慰められているわけで、楊先生はこれを引き合いに出すことで、台湾の現在の喪葬儀礼に欠けているものを補うことを考えていらつしやるのではないかと感じました。

このように、ここでのご発表はどちらも自己批判の精神に富んだものだという印象を受けました。そして、我々は日本から学ぶべきことがたくさんあるということも示唆されたと思います。

ご発表者のお一方、ご参加のみなさま、どうもありがとうございました。(拍手)